

CONTENTS

写真で辿る今昔物語・・・1 - 5 頁

手彩色とカラー総天然色の絵葉書・・・6頁



昭和40年代初め頃の尾道駅前ロータリー風景（尾道市教育委員会所蔵古写真より）と現風景（2023年6月撮影）

写真で辿る今昔物語

4年前に新駅舎へとリニューアルしたJR尾道駅、その半世紀ほど前になる昭和40年代の駅舎と駅前をとらえた一枚。駅舎建物もさることながら、共に写り込む市営バス（左端）やタクシー（右端手前）の型式からも、時代を感じさせるものが多分にあります。停留所に見える多くの乗降客や、仲良し三人組と見えるセーラー服の女学生、道の真ん中に立つ制服姿の女性は、バスに乗務した車掌さんでしょうか。駅舎の西脇に見える建物の広告看板にも目が行きます。

何気ない古い一枚の写真ながら、そこから様々なものが読み取れてきて、じっくり見入っていると興味は尽きません。それはちよつとしたタイムスリップのひとつときで、ビジュアルにそれが実現できる古写真は、れっきとした歴史的・民俗的・文化的な資料の一つとして、その地位を確立していると言えます。

市史の編さんにおいても、近代編・現代編の括りの中で、ビジュアル資料集が別途に構想されていますが、尾道市及び尾道市教育委員会が所蔵するものに市民等から提供（寄贈や複写）を受けたものを含め、実に多くの写真資料が集積されています。それらは古いものでは明治・大正・昭和戦前期に遡るものから、戦後、そして平成時代と、尾道における近現代史のワンシーンを記録するものです。

今回の市史広報では、そんな写真資料の一部を、尾道旧市街地を中心にご紹介し、断片的ながらも束の間の時間旅行を楽しんでいただければと思います。



現在の長江通り風景 2023年6月撮影



長江通りでの水道管敷設工事 『尾道市水道写真帖』より

尾道市の上水道敷設事業の経過を写真で記録する大正14年(1925)5月発行の『尾道市水道写真帖』に収録された、長江通りでの水道管理設工事の記録写真で撮影年月日は大正12年(1923)7月13日。

飲料水の確保に長らく難儀をしていた尾道市民にとって、水道の敷設は待ちに待ったもので、その最大の立役者として忘れる事が出来ないのが、尾道市名誉市民として今に讃えられる山口玄洞翁でした(尾道出身で大阪にて大実業家として活躍。敷設総事業費の3分の2の巨額を寄付)。

写真の位置関係は長江一丁目、善勝寺下から北を向けて撮られたもので、善勝寺下の北側の角地に「角豊運送店」、その隣に「角豊旅館」があったようです。東側(向かって右手)の奥に大きな煙突が見えています、その辺りに在った銭湯の煙突かもしれません。



現在の防地口交差点風景 2023年6月撮影



防地口交差点 1951年頃 尾道市教育委員会蔵

昭和26年(1951)頃の防地口交差点(久保三丁目)風景で、高い位置からの撮影は、鉄道の高架上から撮られたものでしょうか？

左手前には医院の立看板と浄土寺入口の看板も見えます。

国道と尾崎本通りの真正面に建つコンクリート建物は久保交番で、現在この場所は花壇となっており、既に建物はありません。

交番の北側後方に見える細長い建物は今も健在です。横断歩道や信号機らしきものがまだ見えておらず、今に見るような交差点としてはまだ未整備の段階のようです。



現在の旧公園風景 2023年6月撮影



千光寺公園(旧公園)の子供の国 写真絵葉書 尾道学研究会蔵

千光寺山の中腹、みはらし亭前の旧公園に設けられた遊園地「子供の国」は、昭和29年(1954)の春(4月1日)5月20日の会期に、千光寺公園を会場に開催された「瀬戸内海観光博覧会(尾道博)」に併せて開園しました。

遊具には、森永製菓の広告が際立つ飛行塔を始め、豆ジープ、子供の自動車等があったようです。

右手後方に見えるドーム型の大きなケージは鳥が飼育展示されており、鳥舎には孔雀も居たようです。他に熊や鹿、アシカにペンギン、それに近年まで存続したお猿の島と、ミニ動物園と水族館を併設しました。

昭和39年(1964)には頂上部へ移り、平成元年(1989)の「海と島の博覧会ひろしま」には千光寺山グリーンランドとして一新して、平成19年(2007)の開園まで続きました。



現在の住吉浜風景 2023年6月撮影



住吉浜と中央棧橋 昭和20年代末頃 尾道学研究会蔵

昭和20年代末と思われる住吉浜と中央棧橋の風景。手前の大きな屋根は市営上屋倉庫で、現在のオノミチシエアが入る建物になります。

その倉庫の奥(西側)には住吉神社が鎮座し、この当時は尾道水道に向いて立地していました。

その後背が海岸通りで、今よりも道幅が狭い事が分かります。

昭和44年(1969)4月の地元紙報道によると、海岸通りの幅員を平均7メートルから15メートルに拡幅する工事が報じられており、この時に住吉神社も今に見る東向きの形に変わったようです。

加えて倉庫の前には大きな雁木がありましたが、こちらもこの時に消失したものと見られていきます。

林立する帆柱に島周りの巡行船、そして渡海船とかいせんと、港の活気がいきいきと伝わる一コマです。



現在の向島兼吉橋風景



向島兼吉渡船橋 1955年頃 土本壽美氏撮影

昭和30年(1955)頃の向島兼吉の渡船乗り場(尾道渡船の兼吉側橋)、通勤通学の人達が往來する朝の風景。
オートバイに自転車、リヤカーも見え、ボンネットバスは向島町営バス。
看板の内にはテレビの文字が並んで見えますが、昭和30年代は家庭に白黒テレビが普及した頃になり、広告看板からもその時代を窺い知る事ができます。
写真に記録された渡船乗り場の建物は、今はもう失われていますが、バスの後背に見える建物は現存しています。
しまなみ海道開通記念イベント(平成11・1999年)では、西側に続く兼吉商店街と共に橋樑界隈が「向島レトロタウン」として発信され、昭和にタイムスリップする各種のイベントが開催され賑いました。



現在の土生の商店街風景 ※同じ位置ではありません。



土生商店街と造船所従業員の退勤風景 写真絵葉書 尾道学研究会蔵

日立造船因島工場の前身となる大阪鉄工所因島工場の職工達が退勤する光景を記録するもので、通りを埋めるその光景には目を見張ります。写真は大阪鉄工所の写真絵葉書の内の一枚で、大阪鉄工所関係の写真絵葉書は数多く制作されています。
場所は因島工場表門に近い土生町の荒神区の通りで、看板時計は午後5時半過ぎを指しています。
大阪鉄工所は明治14年(1881)に大阪で創業し、因島への進出は明治44年(1911)で、因島船渠を買収して工場としました。
造船ブームとなった第一次世界大戦の時期には、同因島工場の造船量は全国一位であったといえます。
尚、日立造船への移行は戦時中の昭和18年(1943)からでした。
写真は、大正初年頃のものとなされ、造船景気に沸き立つ島の活気・賑わいが伝わってきます。



現在の本通り風景 2023年6月撮影



本通り商店街での七夕祭り 1958年 土本壽美氏撮影

季節の歳時記風景からは本通り商店街での七夕祭りの光景。土本壽美氏撮影。
場所は中央街、現在の絵のまち通り商店街中程で、尾道浪漫珈琲の辺りから西側に向けて撮られた事が、写真から確認されるお店の所在などから特定されてきます。
向かつて左手(南側)手前のお店は寺岡呉服店で、右手(北側)手前には「はかり金庫」の看板が見えます。
本通り商店街の七夕飾りは今も見られる風景ですが、当時の風景には仙台の七夕祭りに見られるような装飾も見られたようです。
その昔に見た本通りの七夕祭りは、「東の仙台、西の尾道」をキャッチフレーズに昭和30年(1955)に中央街から始まり、商店街連合会へと引き継がれて続いたようで、当時はまだアーケードが設置される以前で、雨が降ると台無しと嘆かれたようです。



現在の東御所海岸風景



東御所海岸と思われる風景 1905年頃 尾道市教育委員会蔵

明治38年(1905)頃の古写真で、添付の情報では兼吉渡しではないかとされる一枚なのですが、対岸向島側の風景を見ると、手前に突き出るように見える丘陵は、この当時は独立した島として存在した小歌島(おかじま)ではないかと見られます。すると尾道側は東御所町の海岸となり、カーブした雁木は駅前再開発前の同海岸に見られた雁木の風景となつてきます。
雁木に寄る船は漁船よりも運搬船が中心と見られ、元尾道商議所事務局長だった平櫛資正氏(故人)によれば、大正時代の風景として、東御所の雁木に島周りの運搬船が多く集まっていたと証言されています(平櫛資正氏編著『山陽本線尾道駅界隈』1984年初版・1991年改訂版より)。
島周りの運搬船は「渡海船」と呼ばれ、住吉浜にも多く寄りました。

手彩色とカラー総天然色の絵葉書

尾道風景を切り取った写真絵葉書―カラーフィルムが普及する以前は当然モノクロ風景（写真）になるわけですが、その時期のものの一部に、カラーの風景を見る事ができます。明治・大正期のかなり古い時期に見るそれは「手彩色」（しゅさいしき・てさいしょく）と呼ばれる、モノクロ風景（印刷された写真）に手仕事によって彩色・着色が施されたものになり、一枚毎の彩色になる為、それぞれで多少の違いが見てとれます。

戦後以降の絵葉書でも、「カラー総天然色」と称した同様な着色印刷のものが多く見られます。こちらは一枚ずつの手彩色とは異なり、カラー印刷によって量産されているようです。

浄土寺多宝塔を写す写真上が明治期と見られる手彩色によるもので、ロープウェイからの尾道市街眺望がカラー総天然色として昭和30年代以降に製作されたものになります。

浄土寺風景は、多宝塔及び境内配置と尾道水道との位置関係に違和感を感じる、どこか不思議な一枚でもあります。



『新尾道市史』刊行計画

市制施行一二〇周年にあたる平成三十年度（二〇一八）を振り出しに、令和十年度（二〇二八）までの十一年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。今後の刊行スケジュールは次の通りです。

令和五年度（二〇二三）

文化財編 下巻

資料編 考古・古代・中世

民俗編

資料編 近代・現代

令和六年度（二〇二四）

地理編

令和七年度（二〇二五）

通史編 原始・古代・中世

令和八年度（二〇二六）

通史編 近世

令和九年度（二〇二七）

通史編 近代

令和十年度（二〇二八）

通史編 現代

史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真（写真絵葉書を含む）、古地図、尾道の話題を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承（地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等）についても収集対象となります。もし皆様のお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見された場合は、事務局へご一報ください。史資料については複製（写真撮影・コピー）を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日8:30～17:00です。（文化財係：0848-20-7425）

編集後記 * 2023.7

古写真をめぐる時間旅行を楽しんでいただけましたでしょうか。懐かしいなと思われた方も、今の風景との違いに驚かれた方もいらっしゃると思います。

本誌に掲載した写真の他にも、尾道市内の古写真をご覧いただける尾道遺跡発掘研究所出張展示会が下記の通り予定されています。

残象尾道 ― 写真に見る「失われた風景」―

日時 令和5年（2023）8月2日（水）～8月27日（日）

10:00-21:00（月曜休館）

場所 尾道市立中央図書館1階市民ラウンジ

（尾道市立中央図書館の展示は御調・向島・因島・瀬戸田の各図書館を巡回する予定です。詳細は決まり次第、各図書館からお知らせ致します。）

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。
みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。